

経済連携協定（EPA）に基づいて受け入れられたケアワーカーの ライフコースに関する研究

－受け入れ拡大の中でのライフコースの多様化に着目して－

○ 日本福祉大学 氏名 チェリーアンジェラー未来（会員番号 009856）

キーワード3つ：外国人介護労働者、ライフコース視点、EPA（経済連携協定）

1. 研究目的

外国人介護労働者（本研究では「移住ケアワーカー」とする）の受け入れの拡大と多様化が進んでいる。2019年に、新たな在留資格「特定技能」が創設されてから、「即戦力」としての移住ケアワーカーの受け入れが開始された。「特定技能」の創設により、受け入れルートが4つとなっただけでなく、他の在留資格で受け入れられていた移住ケアワーカーたちのこの在留資格への移行も可能となり、滞在期間の延長ができるようになった。つまり、移住ケアワーカーにとって日本で働く、あるいは働き続けるための選択肢が多様化しており、職場で働くまでの経緯も今後多様化していくことが想定される。そんな中、受け入れ施設にとっては、「どの外国人材がどの制度で入国し、雇用されているかは、外見上は明らかでない」ため、職員が制度の違いを理解し、それぞれに対応した受け入れ態勢を同時に整えていくことの難しさが指摘されている（秋葉ら 2019: 7）。本研究の目的は、最も初めに創設され、受け入れ要件も厳しいEPA（経済連携協定）に基づいて受け入れられた移住ケアワーカーに着目し、受け入れ制度が複雑化する中で、彼ら彼女らはどのような経緯で現在の職場で働くようになったのか、そしてどのような将来設計をしているのか、そのライフコースの多様化の実態を明らかにすることである。

2. 研究の視点および方法

本研究は、ライフコース視点を援用し、インタビューを実施、分析する。ライフコース視点は、個人の主体性と社会状況や制度との関係性に着目するものであり、社会状況による制約の中で個人がどのような選択をし、どのような戦略を立てているかを明らかにする（Christensen & Guldvik 2014）。発表者は、EPA（経済連携協定）に基づいてフィリピンから日本へ受け入れられたケアワーカーたち5人を対象に、半構造化インタビューを実施した。サンプリングは縁故法に基づく。5人のうち4人は、フィリピンのEPA介護福祉士候補者の教育に携わる日本語教師を通して募り、オンラインにてインタビューを実施した（2022年1月から4月）。もう1人は、受け入れ施設へ直接訪問し、対面にて実施した（2023年8月）。それぞれ、インタビュー当時は日本各地の地方に所在する施設で働いていた。

3. 倫理的配慮

本調査の実施にあたっては、大阪大学大学院人間科学研究科社会系研究倫理委員会の審査を申請し、受理された（受付番号：2021036）。また、日本社会福祉学会の研究倫理規程を遵守して実施した。調査対象者には、プライバシーの保護について説明を行い、研究結果の公表について同意を得た。本報告に関連して開示すべきCOI関係にある企業等はない。

4. 研究結果

インタビュー調査の結果、EPA（経済連携協定）という受け入れルートひとつをとっても、日本を含む各国の慢性的な介護の人手不足と受け入れルートの拡大（「特定技能」の創設）を背景に、将来設計は次のとおり多様であることが明らかとなった。

EPA で日本に滞在可能な期間は 4 年間、日本で介護福祉士資格が取得できた場合は、その後も継続して就労が可能である。あるケアワーカーは、介護福祉士資格が取得できず、帰国しなければならなくなった場合、代替策として、アメリカへ行って看護師として働くことを検討していた。他に、自身が介護福祉士国家試験に合格したものの、他県で働くパートナー（同じ EPA で受け入れ）が不合格だったというケアワーカーは、パートナーは「特定技能」に移行し、自身はパートナーの施設に移転することで、2 人で同じ施設で働くとしていた。彼ら彼女らも、お金が貯まればカナダに行くことを計画しているとのことだった。また、あるケアワーカーは、国家試験に 2 度不合格だった後一時帰国を余儀なくされたが、「特定技能」の創設により、40 代になってから日本で昔働いていた施設に戻り、働くことが可能になった。このケアワーカーは、今後、再び国家資格に挑戦すると話していた。以上のように、日本以外の選択肢を有するケアワーカーもいたが、異なる在留資格があることにより、移住ケアワーカーたちは日本でより柔軟な人生設計を可能にしている側面があった。

5. 考察

介護の受け入れ制度が複雑化しているのを背景に、移住ケアワーカーたちはより柔軟に人生設計を行なっている側面があった。しかし、制度それぞれで受け入れの目的や支援体制（支援・調整機関の役割、支援の範囲等）が異なるために、同じケアワーカーが必要とする支援の把握が困難になる、支援が断続的になる等も指摘できる。受け入れ施設は、異なる受け入れ制度を理解しているだけでなく、一人ひとりの移住ケアワーカーのそれまでの経緯を把握していなければ、そのケアワーカーの日本語・介護のスキルやモチベーション等を適切にアセスメントし、必要としている支援を見極めることが難しいと考えられる。そんな中、受け入れ施設の負担がさらに高まることも懸念される。今後の研究としては、受け入れの調整・支援団体の存在にも着目し、移住ケアワーカーが多様化する中で、それらの団体に求められる役割についても検討していく必要性が示唆された。

<参考文献>

- 秋 葉 丈 志・嶋 ちはる・橋 本 洋 輔, 2019「外国人介護人材受け入れの動向～拡大・分
化する制度のもとで」, 『国際教養大学アジア地域研究連携機構研究紀要』, 9: 1-14.
Christensen, Karen and Ingrid Guldvik, 2014, Migrant Care Workers: Searching for Horizons,
Farnham: Ashgate.